

第26回コブレンツ国際ギターフェスティバル & アカデミー

レポート：佐々木 忠 (ギタリスト)



◆第26回コブレンツ国際ギターフェスティバル & アカデミー

ローレライで世界的に有名なドイツ・ライン河流域、風光明媚な観光都市コブレンツの毎年の風物詩となっている「コブレンツ国際ギターフェスティバル & アカデミー」が今年も5月13～21日にかけて開催された。

メイン会場はライン川沿いにあるコブレンツ市の一番大きなコンサートホールであるライン・モーゼル・ハレ。この建物の中にある大ホールとライン中ホールでコンサートが開かれ、マスタークラスは大・中・小の会議室等を使用、今回は参加者多数により、音楽学校も使われた。多くの製作家の楽器や楽譜展示等は1階にある大広場が使用され、この建物以外で行なわれるゲスト出演者のコンサートは、すぐ近くにある選帝侯宮殿で行なわれた。スポンサーとして、サバレス、ダダリオ、音楽学校、そして、市、銀行、ホテルの援助を受け、一流の演奏家をま

とめて聴ける素晴らしいイベントであり、コンクール、コンサート、そしてマスタークラスの三本立てで行なわれるギターフェスティバルである。

●5月13日

前年同様、ライン・モーゼル・ハレ大ホールでのボルフラム・コロセウス指揮、マインツ音楽大学オーケストラによる演奏で開幕、〈歌劇『魔笛』序曲 KV620〉〈ホルン協奏曲 KV447〉〈交響曲第41番「ジュピター」 KV551〉とモーツァルトの作品を中心に演奏した他、Immanuel Ottno〈サウダーデ〉の世界初演も行なわれた。オーケストラはバロックティンパニー、バロック管楽器を使用し、弦楽器は節度を保ったヴィブラート、繊細なピアノシモから極度なフォルテシモを使用し、当時演奏されていたであろうモーツァルトの光と響きを想い起こさせた。それは30年くらい前に、故ニコラウス・アーノンクールがモーツァルト時代の演奏表現を

実践してみせ、音楽界に衝撃を与えた姿を彷彿とさせた。

この9日間にわたるフェスティバルには、作曲家でもある主催者ゲオルグ・シュミットの「ギタリスト達にギター音楽のみでなく音楽全般を知って欲しい」という意図が込められている。これも前回に引き続きイギリス人俳優のナイジェル・ボイルが進行役を務め、ユーモア溢れる独特なアナウンスで会場を盛り立てた。

コンクールは5月13～15日の3日間に第1次予選が行なわれた。150人ものコンクール応募者があり、招聘された12人の審査員は二組に分かれて同時進行で審査を行ない、第2次予選は17、18日の2日間に分けて審査された（ファイナルの審査員は今回は15名）。

●5月14日 / 20:00～

選帝侯宮殿の大ホールで行なわれるゲスト演奏家による最初のイブニング・コンサートには、ゾーラン・ドゥキッチが出演予定であったが、家族に不幸がありキャンセルとなり、急遽、出演要請を受け演奏を務めたのは、今日の世界最高レベルと認められつつあるデュオ・メリスであった。開幕に相応しい素晴らしい演奏を披露してくれた。公私共にパートナーである、スサーナ・ブリエト（スベ



ライン・モーゼル・ハレ



ボルフラム・コロセウス指揮、マインツ音楽大学オーケストラ



ゲオルグ・シュミット



ナイジェル・ボイル

イン)とアレクシス・ムズラキス(ギリシャ)が演奏したプログラムは、ロドリゴ〈トナディーリャ〉、ロイエ〈デュオNr.3, Op.31〉、ボグダノヴィチ〈ソナタ・ファンタジア〉、スカラッティのソナタから〈K.204a〉〈K.9〉〈L.413〉〈K.18〉、グラナドス〈詩的ワルツ集〉、ピアソラ〈タンゴ組曲〉などであった。

● 5月15日 / 17:00 ~

定番のリサイタル・シリーズが開催されるライン中ホールでは、ロシア人ギタリストのロフシャン・マメドクリエフの演奏会が行なわれた。彼は国内外合わせて25のコンクールで受賞し、演奏活動もモスクワ、トロント、パリ、ニューヨークのカーネギーホールと華々しい。ぜひ拝聴したかったのだが、私は他に仕事があり間に合わなかった。後で彼のリサイタルの感想を聞いたところ大変好評であった。本稿の執筆にあたってYouTubeで彼の演奏を聴いたところ、強靱な指から出てくる力強い音、安定したテクニックを通して生まれる旺盛な表現力が感じられた。リョベート〈ソルの主題による変奏曲〉、ラック〈タレガ讃歌〉、ウォルトン《5つのバガテル》、ルドネフ〈The Old time Tree〉、アミロフ《6つのミニアトゥーレ》、タレガ〈グラン・ホタ〉が演奏されたようだ。

● 5月15日 / 20:00 ~

この日の選帝侯宮殿大ホールのリサイタルは、当フェスティバルの常連ゲストの一人、個性派アニエロ・デジデリオ。大きな体、そして大きな手、アントニオ・ミューラー製作のダブルトップギターも手伝ってか、大きな太い指から表出する大きな音、彼特有の美音はとても印象的である。暖徐楽章で醸し出す独特なルバートはロマン派の音楽表現にマッチしている。《スペイン組曲》のタイトルで



デュオ・メリス

演奏されたガスパル・サンスの作品集はバロック音楽ではあるが、彼の演奏はバロックを感じさせないものであった。組曲の最後に配された〈カナリオス〉は、ロドリゴの《ある貴紳のための幻想曲》第4楽章を使用し、ドラマチックでダイナミックな効果を演出していた。続いて《スペイン組曲Ⅱ》と題して、アルベニス、リョベート、ルイス=ピボー、アグアドの作品を順番に演奏、前半の最後はジラルディーノ〈Ikonnostas〉、後半はロドリゴ〈祈りと踊り〉、C=テデスコ《組曲「エスカラマン」Op.177》、ブローウェル《オリシヤスの祭礼》を演奏した。

● 5月16日 / 17:00 ~

ライン中ホールではグレアム・デヴァインのリサイタルが開催された。彼はチータム音楽学校でゴードン・クロスキーに師事後、10年間ブラジルで生活、その間コンサートとマスタークラスを各地で開催し活動が続けた。アランブラ国際ギターコンクール、エミリオ・ブジョール国際ギターコンクールなどで入賞、現在はロンドンのトリニティ音楽院ギター科教授とロンドンのロイヤル・グリニッチ・ギターフェスティバルで音楽監督を務めている。プログラムはスカラッティの4つのソナタ〈K.34〉〈K.533〉〈K.466〉〈K.149〉、アンドレ・ジョリヴェ《2つの練習曲》、ボンセ〈フォリアの主題



ロフシャン・マメドクリエフ

による変奏曲とフーガ〉、C=テデスコ《ソナタ「ボッケリーニ讃歌」Op.77》などであった。

● 5月16日 / 20:00 ~

この日の選帝侯宮殿大ホールのリサイタルには、これも当フェスティバル常連ゲストの一人、皆様ご存知のマヌエル・バルエコが出演。彼の演奏はデジデリオとは対照的で大変オーソドックスである。プログラムはミランの《6つのパバーナ》、バッハ《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番ト短調 BWV1001》、ニーン=クンメル〈ミランの主題による変奏曲〉、後半は、ソル《ソナタ Op.15-b》〈マルボローの主題による変奏曲 Op.28〉、最後に、アルベニス《スペイン組曲 Op.47》から〈アラゴン〉〈カディス〉〈アストゥリアス〉などが演奏された。

● 5月17日 / 17:00 ~

ライン中ホールのリサイタルは、バルエコ門下のルカス・クロパチェフスキー(ポーランド)が出演を予定していたのだが、何かの事情でキャンセルとなり、代役を務めたのが日本でもお馴染みの



アニエロ・デジデリオ



グレアム・ディヴァイン



マヌエル・バルエコ



ジュディカエル・ペロワ



アルバロ・ピエツリとユカ・サカイ

ジュディカエル・ペロワであった。彼は高低2つの足台に両足を置き、右足は乗せたり下ろしたりと、独特な演奏法で知られている。フランスのリール音楽院とサンフランシスコ音楽院で教鞭を執り、数多くのコンサートをこなしている時の人である。

ペロワは今回、コンクール審査員とマスタークラスだけを引き受けていたが、急遽ソリストとして演奏した訳である。曲目は、〈ハンガリー幻想曲〉他、メルツの作品とボンセ〈フォリアの主題による変奏曲とフーガ〉、アサド《6つの小品》など。

● 5月17日／20：00～

選帝侯宮殿大ホールのリサイタルにはこれも当フェスティバルの常連ゲストであるアルバロ・ピエツリが登場した。彼はしばしば日本にも招聘され、深く周到的な独自の音楽解釈、繊細かつ多様な音楽家として評価が高い。プログラムは、バッハ《リュート組曲 BWV997》、ソル〈グラン・ソロ Op.14〉、ジスモンチ〈セントラルギター〉、アルベニス〈ソルチーコ〉〈カタルーニャ奇想曲〉〈マラゲーニャ〉〈セビーリャ〉を演奏した。

第二部でピエツリはウィーン在住のピアニストであるユカ・サカイ（日本）と共演した。彼女はウィーン大学でコレペティトア（オペラ等の練習伴奏を行ない、様々な音楽的助言を与えるピアニスト）として活動し、またウィーン国立音楽大学で教鞭を執っている。バッハ《トリオソナタ BWV529》、C=テデスコ〈ギターとピアノのためのファンタジア Op.145〉、最後にレオ・ブローウェル《3

つの協奏的舞曲》が演奏された。

破綻なく上手く演奏されたと思うが、残念ながらピアノもギターも音が弱くて聴き取れず、音楽表現を理解するには至らず演奏を楽しめなかった。この大ホールはエコーが掛かり過ぎて音響的に問題があるので、私は生の音を聴き取りたいがためにいつも前列に座っているのだが、今回は音響的に最悪であった。

選帝侯宮殿の迎賓館であるホールに即席で設営された舞台は、フェスティバルの期間中、ギター演奏用に造られており、コンサート用ピアノを置くようにはセットされていない。そのためユカ・サカイは演奏にエレクトリックピアノを使用したのだが、ピエツリがギターの生の音を重視したのか、電気ピアノはボリュームを下げて演奏された。音量の弱いギターに合わせてピアノの音量を下げる？ 誰のアイデアでこうなったのだろうか？ 興味深いプログラムであっただけに残念な結果であった。

● 5月18日／15：00～

作曲家のステイヴン・ゴスによる講座『パガニーニとギター』が開講された。



ステイヴン・ゴス



ミハチエル・ダウト (Vn) とフーバート・ケッペル (G)

● 5月18日／17：00～

ライン中ホールでフーバート・ケッペルとミハチエル・ダウト（ヴァイオリン）による室内楽。特に印象的だったのがヴァイオリンに負けず劣らずの音量を出すアントニオ・ミューラー製作のダブルトップギターであった。プログラムは、パガニーニ〈ソナタ第1番〉〈カンタービレ〉、ヴィラ＝ロボス〈ブラジル風バツハ第5番〉、マイヤース〈カヴァティーナ〉、クライスラー〈愛の悲しみ〉、ジョン・ウィリアムズ〈シンドラーのリスト〉、最後にピアソラ《タンゴの歴史》から〈ナイトクラブ 1960〉が演奏された。

● 5月18日／20：00～

毎回恒例となっているギターとオーケストラのための「フライデーナイト・コンサート」がラインモゼール大ホールで開催された。ソリストは、コブレンツ国際ギターコンクールの覇者でもあるガブリエル・ピアンコと日本でもお馴染みのマルシン・ディラ。共演はライン州立交響楽団、そして新鮮で優雅な指揮をする美人女性指揮者マリー・ジャックである。最初にシャブリエ《パストラル組曲》、続いてガブリエル・ピアンコをソリストとしてC=テデスコ《ギター協奏曲第1番 Op.99》が演奏された。後半はマルシン・ディラをソリストに迎えてボンセ《南の協奏曲》が演奏され、最後はオーケストラによるチャイコフスキー《イタリア奇想曲 Op.45》で締め括られた。いずれもハイレベルの演奏であった。

● 5月19日／10：30～

マチネにブラジルのファビオ・ザノンが出演（『現代ギター』誌2017年9月号の表紙を飾っていたのを思い出す）。彼はGFA、タレガ、アレッサンドリアという三大国際ギターコンクールの優勝者として有名、現在はイギリスで王立



ガブリエル・ピアノコ



マルシン・ディラ



(左より) マリー・ジャック、一人おいてディラ、ピアノコ



ファビオ・ザノン



ゴルツ・ダニロフ・ギターデュオ

音楽院の客員教授を務め、コブレンツにも度々招聘されている。彼の演奏したプログラムは、シューマン〈3つの子供のためのソナタより第1番 Op.118a〉、ボプロヴィチ〈第一グランド・ポロネーズ Op.24〉、そして、3つのカリブの小品、2つのアンデスの小品、4つの南米諸国の小品。

● 5月19日／12：30～

コブレンツの旧市街にある聖母教会でゴルツ・ダニロフ・ギターデュオ（ドイツ／ソレン・ゴルツ & イヴァン・ダニロフ）のコンサートが一般客を対象に行なわれた。彼らは青少年コンクール、EGTA 主催（独）アンドレス・セゴビア・ギターコンクールで優勝、ケルン音楽大学ブッパータル分校卒業後に活躍を続け、ノルドライン・ウエストファレン州文部省から奨励賞を授与されているドイツ期待の若手デュオである。このコンサートの収益は社会福祉団体へ寄付された。

● 5月19日／17：00～

昨年同様、室内楽コンサートを開催。ギタリストと共演するのはコブレンツ弦楽四重奏楽団、コンスタンティナ・パッパ Vn)、シルケ・サビンスキー (Vn)、ナナコ・ホンサレク (Vi)、マライケ・シューネマン (Vc)。

最初にジュリアーニ《ギターと弦楽四重奏のためのグラン・クインテット Op.65》が演奏された。第1楽章「序奏」、第2楽章「うつろな心」の主題と変奏、終楽章「ポロネーズ」から成る。ギター・パートはハンス・ウェルナー・フッパーツが担当した。彼はアーヘン音楽大学のギター科教授で副学長も務めている。室内楽に慣れている彼の演奏は音量音色も良く、他楽器とのバランスも素晴らしく、非常に楽しめた。

次に演奏されたのは、ド・フォッサ《2つのギターとヴァイオリン、チェロによる四重奏曲第3番イ長調 Op.19》こちらもソナタ、メヌエット、ロンド楽章から成る作品である。演奏はギターがヨハネ

ス・モンノとオラフ・ヴァン・ゴニセン、ヨハネス・モンノはケルン音楽大学卒で現在はシュトゥットガルト音楽大学の教授、オラフ・ヴァン・ゴニセンはその昔、M.トイヒャートとフランクフルター・ギターデュオを結成して大活躍し、現在はハンブルグ音楽大学の教授を務めている。共演は引き続きコブレンツ弦楽四重奏楽団のメンバーで、ヴァイオリンのコンスタンティナ・パッパとチェロのマライケ・シューネマンの二人。

最後に演奏されたのは、ピアソラ作曲、バルエコ編曲による《ギターと弦楽四重奏のための5つのタンゴ》であった。ギターはワイマール音大とベルリン音大の教授を務めるトーマス・ミュラー＝ペリング。演奏はいずれも一級品である。

一つ欲を言うならば弦楽四重奏団との音のバランスであろうか。最初のジュリアーニがこの日一番バランスが良かったと思う。次のド・フォッサの作品では、2つのギターの音量がヴァイオリン、チェロに比べて弱く、ピアソラ作品では逆にギターが強過ぎた。

アルバロ・ピエッリとユカ・サカイによるギターとピアノのデュオを聴いた時にも感じたことだが、誰か専門のミキサーがいたならば、こういう音量の問題は起こらなかったのではないかと、非常に残念に思った次第である。

● 5月19日／20：00～

この日の選帝侯宮殿大ホールでのリサイタルには、またしても当フェスティバルの常連ゲストであり、当代最高峰のギタリストと称されているデイヴィッド・ラッセルが登場した。彼の演奏は今までも沢山聴いているが、どのコンサート



ハンス・ウェルナー・フッパーツ (G) とコブレンツ弦楽四重奏団



ヨハネス・モノとオラフ・ヴァン・ゴニセン (G)



トーマス・ミュラー＝ペリング

もハイレベルでその水準を維持している。高度なテクニックと様式感、センスの良さを感ぜずにはいられない。

曲目はヴァイスの組曲からプレリュード、アルマンド、ロイヤル・クーラン

ト、トンボー、アレグロ (ラッセル編曲)、グリーク《7つの叙情詩風作品集》、第二部は、バッハ《3つのシンフォニア》(アルネ・ブラットランド編曲)、そして、セルジオ・アサドがデイヴィッド・ラッセルのために作曲し献呈した《David's Portrait (デイヴィッドの肖像)》(ドイツ初演)、最後にケルトの民族音楽が演奏された。

● 5月20日 / 10:30 ~

ドイツを含むキリスト教の国々ではこの日、聖霊降臨祭の祝日であり、日曜日の午前中は皆教会の礼拝に向かう。毎年フェスティバルの一環として音楽家を繰り出しボランティアでミサを行な

い、この日に集められた募金はガーナの "Midwives Quarters Have" に寄付される。ミサに参加した演奏家は Jörg Gauchel 指揮による青少年ギターアンサンブルとペンテコステ・アンサンブル、メンバーは Ulrike Courbier (ソプラノ)、Almut Nieratschker (アルト)、Roland Klein (テノール)、Willi Nieratschker (バスとオルガン、ギタリストではオラフ・ヴァン・ゴニセン、ヨハネス・モノ、トーマス・ミュラー＝ペリング、ハンス・ウェルナー・フッパーツの4人が参加した。

● 5月20日 / 17:00 ~

この日はゴラン・クリヴォカピチが出演した(写真がないのが残念!)。彼は GFA、コブレンツ等、全部で14個もの国際ギターコンクールを制覇した強者である。人柄も良く皆から慕われている。最近のニュースとしてはケルン音楽大学ヴッパータル校の教授に就任した。彼の益々の活躍を期待している。今回のプログラムはオール・バッハであった。バッハ《無伴奏チェロ組曲第2番 BWV1008》、《プレリュード、フーガとアレグロ BWV998》、《無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番 BWV1006》。

● 5月20日 / 20:00 ~

メモリアルコンサートと題して、昨年亡くなったアメリカ合衆国のジャズギタリスト、最高のインプロヴァイザーの一人と謳われているジョン・アバークロンビーの追悼コンサートが Cafe' HaHN で行なわれた。場所は中心街から離れていたため私は行くことを断念し、疲労回復に努めた。



デイヴィッド・ラッセル



ギターの展示会場



キャンベル・ダイヤモンド

● 5月21日 / 11:00 ~

2017年のコンクール優勝者であるキャンベル・ダイヤモンド（オーストラリア）の演奏会が開催された。

プログラムは、タレガ〈プレリウド第5番〉〈2人の姉妹〉、武満 徹《森のなかで》から〈ミュー・ウッズ〉、武満 徹《ロンドンデリーの歌》、バッハ《無伴奏チェロ組曲第6番 BWV1012》、ブラジルのボサノヴァ音楽を2曲、ジョビン〈ルイーザ〉、ボンファ〈リオの旅〉そして最後にフィリップ・ホートン〈ソナタ・オフィーリア〉が演奏された。

◆コブレンツ国際ギターコンクール2018

● 5月21日 / 14:30 ~

コブレンツ国際ギターコンクールの本選が選帝侯宮殿の大ホールで開催された。ファイナリストは6名、クリスティナ・バルリ（ノルウェー）、マイケル・バットン（イギリス）、フランソワ・クサビア・ダングルモン（フランス）、ディミトロ・オメルチャク（ウクライナ）、イゴール・クロコフ（ロシア）、そして、藤元高輝（日本）の順で、途中で休憩を挟みながら、各自30分間のプログラムを演奏した。

本選の審査結果は以下の通り。

第1位：該当者なし

第2位：藤元高輝

第3位：フランソワ・クサビア・ダングルモン

副賞のホアキン・ロドリゴ賞はステイヴン・コーワン（カナダ）、ドット・ギター賞はウー・ヨウ（中国）、コブレンツ国際ギターアカデミー賞はクリスティナ・バルリとマイケル・バットンに授与された。

採点方式は民主主義に基づき、順位は多数決で決められる。スポーツ、武道の世界は勝敗ははっきりと確認されるが、音楽芸術は趣味の違いで大きく左右される。当然、技術的な問題も対象とはなるが、何色が好みかには個人差があり、絶対的な評価にはならない。それゆえ様々な見解も考慮し、多数決で順位を決めることになる。したがって審査委員の数は多い方が普遍性がある。

フィナリストを聴き、審査委員15名の選んだ第1位から第6位の順位は概ね一致していた。しかし残念ながら、合計点が第1位が得るべき点数には届かなかった。協議の結果、第1位なしで、第2位が藤元高輝、第3位がダングルモン、順位では第3位になるべき者が第4位に転落という結末になった。

藤元高輝は誰よりもよく演奏していた。レパートリーとして弾き込んでいる彼のプログラム、アグアド〈序奏とロンド〉、ロドリゴ〈ソナタ・ジョコサ〉、H.W. ヘンツェ《王宮の冬の音楽》はよくアナリーゼされ、音色を多様に変化させ、陰影も上手く引き出し、ドラマチックな演奏であった。それではなぜ合計点が少なかったのだろうか？これが彼のリサイクルであれば批評も満足いくものであったと思う。しかしコンクールは違う。他者と比較されてしまう。彼の奏でた音楽は素晴らしかった。彼自身は巧みに

に音色、陰影を付け演奏していたが、他者に比べて音量、音幅に問題があった。フォルテ、フォルテシモであれば、当然、堅固な安定した音質を必要とするが、音は割れていた。原因は右手タッチの問題か、爪か、それとも楽器の持つ収容力か、色々と課題が残った。

楽器を操る演奏家の技量は当然であるが、楽器の優劣は表現力を際立たせる。現在コンクールを目指している人達が愛用している楽器はダブルトップ製が多い。音量、安定した音幅が素晴らしく良い。ピアノで言えばアップライトとグランドピアノの差を感じさせる。1960-70年代は美音を持つラミレス（杉材）が名器として大変もてはやされていた。楽器は弦長665mmで胴体も大きくしたが、音量の面で杉材は松材に比べ伝達力が弱くコンクールでは損をしていたのを思い出した。

コンクールの審査員は、アルフレッド・アイクホルドを委員長とし、デール・カバナ、ルチオ・マタラッツォ、佐々木 忠、トーマス・ツァビエルハ、ザブリーナ・プラスカリッチ、シュテファン・ハッケル、ステイヴン・ゴス、ヨハネス・モンノ、ギュンター・シリクス、フーバート・ケッペル、ハンス・ヴェルナー・フッパーツ、トーマス・ミュラー＝ペリング、ジュディカエル・ペロワ、オラフ・ヴァン・ゴニセン、ゲオルグ・シュミットの計15人であった。

● 5月21日 / 19:30 ~

フェスティバルの最後はヨルク・ガウヘル指揮、ジュニアギターアカデミーオーケストラの演奏で幕開けし、授与式が行なわれた。その後、コンクール入賞者が演奏を披露し、音楽に満ちた素晴らしい9日間の幕が閉じられた。



コンクール首席第2位を獲得した藤元高輝



審査員を務めた佐々木 忠



佐々木 忠のレッスン風景